

行信兩卷の見方について

(安井廣度氏の所説に對して)

大江淳誠

先年東大の結城令聞教授が信卷別撰論を公表せられ、私がそれに對して反論をのべた。それは私が收えて撰述問題を論述せんとするのではないが、結城教授が其の論證の中に取扱つておられる内容の問題、ことにその行信兩卷の見方に關する論述が吾人年來の所見と異り、到底了解し難い、隨つてその論據に立つ限りに於いては、信文類の別撰説には同意し難いとしたのである。またもとより行信論をのべんとしたのではない。結城教授が行信論をその中のべておられるから、私の論説もおのづから行信論に及んだのである。もし行信を論述せんとするならば、論述の用意その順序等をまとめてのべるのである。然るところ本年に至つて、大谷派の講師安井廣度氏が、東海同朋大學の學報誌上に「行信兩卷の見方」と題して、相當長い論文を發表せられ、其の中に結城教授の説に對すると共に、私の所説に對して批評を加へていられる。私はその論文の別刷を友人の方から見せてもらつた。その所論の中にはもとより私と見解を一にする所もあるが、行信の解釋、行信兩卷の見方については、可なり異つた意見の様もある。行信論は眞宗の學問に於いては、最も中心であると共に、廣い所論でもある。短篇の論文に於いてつくすことは出來ぬ。さりな

から私の所論に對して御批評をうけたからには、一往これに就いてお答へし、且またお尋ねを致す可き筋合と考へる。故にこれは結城教授に對するの意とは異つて、純然たる眞宗學上の問題である。本年五月高田派本山で開催された眞宗連合學會の第四回大會の席上に於いて、取り敢へずこれに對する私の意見をのべたのであるが、與へられ時間は僅かに十五分であつて、もとよりその項目だけの羅列も出來ぬ程であつた。ところで『眞宗研究』第三號に掲載されることとなつたのではあるが、これまた許されたる紙數は少ない。それでその詳しいことは他日に譲つて、いまはたゞ與へられる紙數に於いて述べることにする。

一 行に就いて

安井講師は先づ行文類の行の見方に就いて、古來能行所行の名目を立つることに就いて、此れは不用意なる學者の用語なりとし、『六要鈔』に使つておられる意味と異なるとし、また所謂行の能行所行の論は泥沼で、自分も曾てその泥沼に苦しんだことがある等とのべておられる。然しながら『六要鈔』の意味が所行能信の意味であつて、行文類の行の上について能所の目を立てられたのではないとしても、行の研究に於いて名號と稱名とを能行所行として論じたからといつて、必ずしも咎む可きものではなからう。また、この論は泥沼などと申す可きものではなく、元祖法然上人の念佛爲本をうけられて、これを行信に開示せられた宗祖の功績を窺ふために、一生の勞を捧げて先哲のつくされた努力のあとである。私はこの研究の上に奥深い行信の妙味をくむことが出來ると信ずるものである。

安井講師は「行卷の行は本願の念佛であつて、祖典の何れのところに名號と書いてあつても、それは十念の名であつて、稱名以外のものではない」といひ、また行の意義に於いて「名號行は佛攝化の行を意味し、稱名號行は衆生口稱の行を意味する」とし「佛攝化の行と云ふことをいひだすと、本願も光明も佛攝化の行であるから、行と稱せねば

ならぬ。第一に用語の混亂を招く、四十八願は四十八行といわれ、十二光は十二行といわれることになる」といひ、
而して「何れの行も及び難きわれわれ衆生が行ふようにと、佛が選擇し廻向し給ふの衆生往生の行を説かれたものであらう」と云つておられる。これは先づ私の考へと異なることである。名號を以て佛攝化の行とし、稱名を以つて衆生の行ずるところの行とされる様である。さて私の考へを申すならば、行文類に立つるところの行は、それが三法門に於いて語らうと、四法門の義に開いてはいはうと、行の意義に別がある筈もなく、またその行の體に於いても別はない。ところで行文類の行は、第四卷證文類の果に對する因法である。因に行信があつて、行は所謂往相正業であり、信は證大涅槃之眞因である。證文類の往相四法の結びには、行信を合して因とし「若因若果」と示されてある。行文類の大行の出躰釋には

斯行卽是攝_三諸善法_二具_三諸德本_一。極速圓滿、眞如一實功德寶海。故名_三大行_一。

と示されてある。この「故名_三大行_一」とはこの一段の文を以て行の名義を示すものとされるのであつて、明らかにこれは證果に到らしむる因法の義である。即ち衆生が行ずるが故に行と名くとされるのではなく、また衆生の行ずるところの行とされるの意でもない。この行の中に一切の行徳を圓具し、衆生に極速圓滿の益を興ふるが故に行と名づくとするのである。極速圓滿とは、もしこれを現生にとれば聞信のところに報土の眞因を圓滿せしむるの義とすべく、これを當來とすれば、淨土に到つて速疾に無上正眞道を超證せしむるの義とせねばならぬ。何れにしてもそれは衆生をして轉迷開悟せしめる因法とされるのである。然るにこの出躰釋の文には「大行者則稱_三無碍光如來名_一」とあつて、明らかに稱名を以て示されてある。これは果して稱名を大行とされるの意であらうか。こゝが名號と稱名との關係を語るところであつて、安井氏が所謂泥沼と云はれる能行所行の論の出て來るところである。能行所行と云ふ言葉は私も使はない。それは安井氏の指摘されるが如く、その語義が人によつて異なるからであり、またその様な言葉を使わなく

とも、名號と稱名と云ふ語で表はしうるからである。たゞさういふ言葉をつかつて論ずる人に對するときは、論述の必要上それに随つてその語を使ふこともあるが、私としては所謂能行所行の語は用ひぬのである。然しながらその能行所行の名目を使つて論ぜられて來たところの、名號を行とするか、稱名を行とするかの問題は、論究せざるを得ざる重要な課題である。

出鉢釋の「大行者則稱『無碍光如來名』なる語は、下の經文引證の後におかれる稱名破滿の釋と對映し、共に『論註』起觀生信章に出づる讚嘆門の釋によられることは何人も首肯するところである。讚嘆門はもとより五念門行の第二門、口業讚嘆の稱名であるが、それが讚嘆の行と云はれるのは、所謂如實なるが故であり、如實の實とは法鉢の光明であり、名號である。『淨土論』に

稱_二彼如來名、如_二彼如來光明智相、如_二彼名義、欲_レ如_レ實修行相應_レ故

と云つてある。『論註』は之を釋するに、先づ光明に就いて無碍の義をのべて破闍を語り、次にこれを名號に歸せしめて詳しく破闍滿願を釋する。破滿は法鉢に有する力用であり、而してこの法體の義に契はざる所謂不如實の稱名には破滿の德は語られず、これと相應する一心具足の如實の稱名には破滿の德を語り得となすのである。稱名に就いて如實と不如實とを簡別し、法鉢に相應する如實の稱名を以て破滿を語り得となす、この釋意を承けられるのが、行文類の出鉢釋である。その意は化身土文類眞門釋に於ける第二十願の念佛の如きに簡別する。眞門釋には第二十願の稱名を以て「教者頓而根者漸機」といひ「行者專而心者間雜」と云つてある。等しく稱名すと云つても第二十願の稱名は大行とは云はぬ。第十八願の乃至十念の念佛に限つて大行の名を與ふるものは、それが如實なる稱名の故であつて、如實なれば大行といひ、不如實ならば大行と云はぬ。さすれば大行の大行たるところは、如實の實にあるのであつて、稱のところには在るのではない。これが『論註』に破滿の力用を法體に語ると同じく、大行の實義を法體に在り

とするの意である。尤も行の意義を衆生が行ずるが故に行となすが如き説ならば、また別であるが、私はそういふ説はとらず、出鉢釋の「故名_三大行_二」と云はれる文意は、全く佛果に進趣せしむる因力の方から大行の名を立てられたものとするのである。

『論註』には稱名と名號とを並び出して示される所が諸處に在る。上卷の終り所謂八番問答の釋は、『觀經』下々品の十念往生を出して、論主所共の機と判ぜられるのであるが、その第六問答は、十念々佛と五逆の重罪の輕重の義をあらはすのに、輕重の義は時節の久近多少には在らずとし、「在_レ心_レ在_レ緣_三決定_二」の三在の釋がなされてある。

その在心の釋に、十念を以て「聞_三實相法_二生_一」といひ、在緣の釋には

依_三阿彌陀如來方便莊嚴眞實清淨無量功德名號_二生

と云ふ。而してこれが下卷觀察鉢相章の國土鉢相釋の終りに於ける問答に、同じく下々品の十念往生を出し、その得生の所由を明して、名號を以て摩尼如意寶珠に譬へ、滅罪得生の理由は全く名號の力用に在りとして

聞_三彼阿彌陀如來至極無生清淨寶珠名號_二、投_三之濁心_二念々之中罪滅心淨即得_三往生_一

とあるのと照應する。兩處の文は同じく下々品の十念往生を釋し、その得生の功を以て名號に在りとするのであつて、讚嘆門に破闇滿願を以て名號の力用に在りとするのと同一の義である。

此等の『論註』の釋は何れも名號と稱名とを法體と機受とに分けて示されるのであり、而して高祖は此等の釋の中、八番問答の釋は、第二問答以下の七問答を信文類の終りに出し、讚嘆門の釋は信文類に全引されてある。

安井講師は、祖典の上にはどこに名號とあつても、稱名の外の何物でもないと申されてあるが、もとより稱名を名號として出されるところもある。然しながらどこに名號とあつても稱名の外の何物でもないと云はれることは首肯出來ぬ。今あげたところの『論註』の文は、高祖が行信兩卷に引用されるものであつて、此等の文は出されるところの

名號の語がすべて稱名を指すと云つたのでは解釋は出來まい。また若しそれは引文であり、高祖御自身の御文では名號とは稱名なりと云はるゝならば、『高僧和讃』に『論註』の意によつて、

安樂佛國ニイタルニハ

無上寶珠ノ名號ト

眞實信心ヒトツニテ

無別道故トトキタマフ

といひ、

無碍光如來ノ名號ト

カノ光明智相トハ

無明長夜ノ闇ヲ破シ

衆生ノ志願ヲミテタマフ

といひ、

名號不思議ノ海水ハ

逆謗ノ屍骸モトトマラス

衆惡ノ萬川歸シヌレバ

功德ノウシホニ一味ナリ

とあるが如き、何れも名號そのものを指されるのであつて、稱名を指して名號とされるものではないであらう。

更に教文類の宗躰釋に就いて考ふるならば、かの釋は『論註』のはじめに三經の躰をのべて

釋迦牟尼佛在_三主舍城及舍衛國、於_三大衆之中_二說_三無量壽佛莊嚴功德_一。卽以_三佛名號_二爲_三經體_一

といつて、三經の所詮を以て無量壽佛の莊嚴功德とし、而して、此れを名號に歸せしめて名號爲體とするのである。

『論註』は已にのべるが如く、名號と十念々佛とを法體と機受とに分ける、隨つていまの名號爲躰の名號を以て稱名とするわけにはゆかぬ。而してこれを承けられたのが教文類の宗躰釋である。『論註』は通じて三經に就いて語り、高祖は別して『大經』に就いて語られる。即ち『大經』の大意を結んで

是以說_三如來本願_二爲_三經宗致_一、卽以_三佛名號_二爲_三經體_一也

と云ふ、この名號をもつて稱名を指すものとすることは出来ぬ。即ちこれは『大經』の能詮所詮の關係を示すものであつて、願に就いて云へば第十七願の意である。第十七願は名號の咨嗟稱揚を誓へるものであつて、その誓ひに應じて現はれたる諸佛中の隨一の佛が釋迦である。故に教文類の宗牀釋は、第十七願の「咨嗟稱我名」にあたるものであり、第十七願の我名が稱名でないならば、教文類の名號爲牀の名號も稱名ではない筈である。安井氏は『六要鈔』の意に依るとしてこの宗牀釋に出づる名號も稱名とされる様であるが、『論註』は『論註』の文の照應による可く、本典は本典の文の照應によらねばならぬ。『六要鈔』は末註の一であり、而して『六要鈔』の意も果してしかるであろうか。爰に於いて行文類の標擧の意によつてこれを述べることにする。行文類に標擧せらるゝ「諸佛稱名之願」と云ふのはもとより第十七願であるが、これは行の願として出されるのであることは、その細註の初めの句に「淨土眞實之行」とし、同じく行文類の終り偈前の釋に

其眞實行願者諸佛稱名願也

とあるによつて明らかである。然るに第十七願は、已にのぶるが如く能詮、所詮に亘り、能詮は咨嗟稱、所詮は我名である。その能詮によつて第十七願を語れば、『御消息集』に

諸佛稱名ノ願トマフシ、諸佛咨嗟ノ願トマフシサフラフナルハ、十方衆生ヲス、メンタメトキコエタリ。マタ十方衆生ノ疑心ヲト、メン料トキコエテサフラフ。彌陀經ノ十方諸佛ノヤウニテキコエタリ

等とあるが如く教の願となるのであるが、いま行文類は眞實行の願とされるのであるから、所詮の我名の側によつて語られるものであろう。而して古來この咨嗟稱を廣略二讚と分けて、咨嗟を以て廣讚とし、稱を略讚の稱名として、いまは諸佛稱名之願とされてあるから、略讚の稱名を標擧するとの見方も一義にはあるが、それは吾人の首肯し難い所である。然し今はそれを論述する違はない。たゞ一言するならば、高祖が第十七の願名を出される中に「諸佛稱揚

之願」と申されるのは、咨嗟稱の稱によられたのであつて、稱を稱揚とされるからには廣讚の意であらう。正依の『大經』に稱の字を出されてあるのはすべて廣讚の意である、即ち『大經』下卷の文、行文類に願成就文として出されるのに
十方世界無量無邊不可思議諸佛如來、莫不稱嘆一

といひ、第十二願成就文の中には「不_レ但我今稱_二其光明_一」「日夜稱說」「歎譽稱_二其功德_一」といふ。又第十三願の成就文にも「其數難量不可稱說」とあるが如く、即ち魏譯の『大經』の譯例として、稱を略讚稱名としてあるところはない。また三經は第十七願の誓に應じて、諸佛中の隨一として出現された釋迦の教説であるが、その三經の中の何處にも、釋迦や諸佛が略讚稱名しておられるとする所はない。然らば第十七願の稱を咨嗟と區別して、咨嗟を以て廣讚とし、稱を以て略讚とすべき典據はないのである。咨嗟稱は歎譽稱と云ふも同じく、たゞ一つの廣讚であつて、例は三經の説示である。『唯信鈔文意』に

第十七ノ願ニ十方無量ノ諸佛ニワカナヲホメラレムトナヘラレムトチカヒタマヘル、一乘大智海ノ誓願ヲ成就シタマヘルニヨリテナリ。阿彌陀經ノ證誠護念ノアリサマニテアキラカナリ。證誠護念ノ御コ、ロハ大經ニモアラハレタリ。

とあつて、ホメラレム、トナヘラレム、と切つてある爲に「ホメラレム」を咨嗟であつて廣讚とし「トナヘラレム」を稱であつて略讚とする義がある。「トナヘラレム」が稱の字義であることは勿論であるが、これを略讚とするは何故であるか。「トナヘル」とは「タ、ヘル」といふに同じく口業に稱揚するの意であつて、古人が口音陳唱の義を示す意であるとするの解釋が正しい。若しそれを假りに咨嗟と稱を區別して、廣略二讚とするとしても、諸佛讚嘆は教行二法の中では教の所屬であつて行の所屬ではない。さて廣讚略讚のことで紙を費やしたが、この咨嗟稱我名の咨嗟稱は能讚で『論註』の釋にあてゝ云へば「說_二無量壽佛莊嚴功德_一」といふ説であり、我名は「無量壽佛莊嚴功德」を略攝

せる「名號爲躰」の名號である。故に教文類の宗體釋に於ける名號爲體の名號は法體名號であつて稱名ではない。『教行信證文類』の中には、稱名を指して名號とさるゝ所もある。信文類の三心釋の結びに「眞實信心必具_ニ名號_一」とある名號は明らかに稱名を指すのである。何となれば法體名號とすれば、次の「名號必不_レ具_ニ願力信心_一也」とあるの文が解釋出來ぬことになるからである。また一乘海釋に念佛諸善比較對論といふ、その二教對の中に「名號定散對」とあるのも、念佛を名號と呼べるものと思はれる。更にまた化身土文類に要門の行を釋せられる中に

助者除_ニ名號_一已外五種是也

の名號も一心專念彌陀名號の意味で、稱名を指されるものと私は考へている。然し乍ら名號とあるのを、すべて稱名以外の何物でもないといふ説には同意出來ぬ。教文類の宗躰釋に出づる名號のことは已にのべたところであるが、その他の文にもこれが見られる。即ち眞門の行信を釋せられるところに

以_ニ助正間雜心_一稱_ニ念名號_一

といふ、この稱念は名號を稱することであるが、名號は稱名ではない。

次にはその名號と稱名との關係であるが、これは相即不二である。私はこれに就いて、稱即名であると共に、名即稱なりとするのである。即ち稱名即名號と云つただけでは片不二であつてほんとうの不二にはならぬ。名號即稱名であるからこそ、随つて稱即名となるのである。安井講師の論文の中には、稱名を名號に歸して稱即名と云ふに至つた、と述べて居られるが、なる程さういふ一派もある。然しそれではいま云ふが如く片不二である。蓋し名號は常に法界に動いて、如實なる行者の上に稱せしめつゝあるものである。故にその如實なる行者の稱名は、擧體名號の動きつゝあるものに外ならぬから、稱即名である。而して私が名號即稱名とする理由は、名號は本願成就の嘉號なるが故なりとするのである。『論註』の不虛作住持功德の釋に

願以成_レ力、力以就_レ願、願不_レ徒然、力不_レ虚設、力願相符畢竟不_レ差、故曰_三成就_一

と云つてある。高祖はこれを行文類の一乘海釋、及び眞佛土文類の中に引用されてあるが、これは不虛作住持功德成就の成就の釋名であつて、願は法藏因位の誓願、力は果上の自在神力、この因願と果力が畢竟不差であつて、果上の自在神力は、常に因位の誓の如くはたらくとするの義である。果上の神力が因位の誓願に應じて動かなかつたならば、本願成就の果ではないことになる。是を以て如來果上の自在神力は、その因位の所誓の如くに活動する。衆生をして往相還相せしめつゝあることが、果上の神力の活動である。衆生より云へば轉迷開悟の始終であるが、これを如來より云へば如來の自在神力の活動である。而してこの如來果上の神力を攝めて示すものが名號である。故に名號は、常に法界に動いて、衆生をして往相還相せしめつゝある。而していまは行文類であるから、これを往相四法中の稱名について語るのである。惟ふに四十八願は、一の第十八願に歸し、第十八願は、三心十念と往生とを誓ふてある。三心十念は因であり、往生は果である。その三心十念について云へば、信せしめ稱せしめんととの誓願である。誓願が已に信せしめ稱せしめんととの誓願であるならば、その誓願に隨ふて成就せる名號は、常に法界の衆生に喚びかけ、而して信せしめ稱せしめねばならぬ。即ち信せしめ稱せしめざる固然たる名號はない筈である。斯の如く動きつゝあるが故に、因願果力畢竟じて差はざるものとするのである。『執持鈔』に

サレハ名號ニツキテ信心ヲオコス行者ナクハ、彌陀如來攝取不捨ノチカヒ成スヘカラス。彌陀如來ノ攝取不捨ノ御チカヒナクハ、マタ行者ノ往生淨土ノネカヒナニ、ヨリテカ成セン。サレハ本願ヤ名號、名號ヤ本願、本願ヤ行者、行者ヤ本願トイフ、コノイハレナリ

とあるのがこの意である。本願の成就せる名號であれば、名號と本願とはたゞ同一法の因果である。隨つてまた本願は、名號果法の内在の性格をあらはすものとも云はれる。かく名號は因位の誓願の誓ひの如く、行者をして信せしめ、

行せしめる。若し信じ行ずるものがなかつたならば、誓願成就の名號とはいはれぬことになる。故にその行者の信じて稱名するまゝが、本願成就の果號の動く相なのである。これを私は行者をして稱へしめつゝある名號大行と云ふのである。安井講師は私の此の義を評して「もつてまわつた解釋」と申されてあるが、もつて廻つた解釋のつもりではなく、行文類に示される大行の本然の解釋が然りとするのである。安井講師は行を稱名とし、佛が衆生をして行せしむる様に廻向し給ふの法であるから大行とす、と云われる様である。私はさきにのべた様に、行の體を名號とし、名號は、衆生に萬行造作の因徳を具せしめて、佛果に進趣せしむる故に大行と名づくとするのであつて、衆生をして行せしむるが故に大行と名づくとはせぬ。だから稱せしめつゝある大行、換言すれば行せしめつゝある大行と云つても、その行せしめつゝあるが故に大行と名づくとするものではない。

斯の如く名號は固然ならず、常にその因位の誓ひに隨ふて活動し、如實の行者をして信せしめ稱せしめつゝある、故に名即稱である。また名號の動いて稱せしめつゝあるのであるから、稱名の當躰が名號である、故に稱即名である。安井講師の論文の中に

願則行のゆへに本願を聞いてこれに歸すれば未だ稱へざるに念佛成佛の正業を成じ（中略）また行則願のゆへに終日念佛しても念佛に機功を混へず、「恒に常に不可思議の徳海を稱念していよくこれを喜愛し特にこれを頂戴する」のである。

と云つておられるが、氏の所謂行とは念佛を指されるのであるが、願則行、行則願と申される表現は、私の法體の名號と衆生の稱名との相即不二とするの義と一面通ずる様にも思はれる。然し乍ら行の定義を稱名とする限り、未だ稱へざるに念佛成佛の義を成ずると云ふ様になつて、初起一念の行の上に不稱而稱の義をかけることゝなり、これは吾人のとらざるところである。

二 信 につ い て

結城教授が信卷はなくとも、行卷の中に已に信は説明しつくされている等の理由で、信卷は後の時、別の意圖から撰述されたものとされるのに對して、私は行文類には信は出ているが、信の説明はしてない。即ち信に言及はしてあるが、信についてそれが正因となる理由は、行文類なくしては分らぬと申したのであるが、これに就いて安井講師は雙方に批評を下して、私の所説に對して「先づ大江教授が信卷のような信の説明でなくては、信そのものゝ説明にならないといはれるのは、どうも行きすぎであらう。信を表現するのに、歸命とか獲るとか憑むとか聞信とか信樂とか憶念とか、種々なる名目を用ひること、それ自體が信そのものゝ説明ではないか。例へば煩惱の異名のように、それらの名目は信相を詳かにするものである」等と申されてある。これは私としては甚だ解しかねる言葉である。名目を並べることが信相を詳しく説明されるものであるとは、如何なるわけであらう。それなれば願文にも至心信樂欲生とあり、成就文には信心歡喜とあるのでこれも説明とされるのであらうか。相承七祖の中で特に三心の詳釋をされるのが善導であり、高祖は『二卷鈔』の下卷の最初に「唐朝光明寺觀經義云」と標して、善導の三心釋によつて眞假の行信を示されてある。行文類の三二問答の釋、化身土文類の三經一異の釋、共に心についての問答であり、また同じく善導の釋意によられるのであつて、眞假を對簡していよいよ他力の信を明らかにされるのである。行文類に信に言及されてあることは、已に吾人ののぶるところであつて、それも單なる名目の出ているばかりではない。行文類の中に信の義の出ている所といへば、かの六字釋である。行文類の六字釋は、行文類の三心釋の、約佛三心の義に該當するものである。しかしながら衆生の上の三心の義に就いては、詳しい説明とは申されぬ。私の信心の説明とは、三心の説明である。第十八願を以て「木願三心之願」と申される高祖が、未だ三心の解釋を示されぬのに信心の釋が出てい

ると云ふべきであろうか。化身土文類の三經一異の問答にも、大本の三心と觀經の三心と一異如何といひ、また大本の三心と觀經の三心と小本の一心と一異如何ぞや、とも申されてある。三心の解釋をせずして、本願の信心の解釋ありとは申されぬ。行文類の中に三心の名があるであろうか。偈前の釋に

其眞實信願者至心信樂之願

といひ、正信偈に「至心信樂願爲因」とあるだけであつて、三心の名すら出してない。沉んや説明をやである。信樂とか信心とか云ふ名目だけならば、すでに總序の文に出ており、教文類の首めの二相四法の名目の中に出してある。蓋し行文類の兩重因緣釋は、行信兩卷の關係をあらはすものであり、後重のはじめに

能所因緣雖レ可三和合ニ非三信心業識ニ無レ到ニ光明土ニ

とあるの文は、全く信文類の所顯を俟つの意であろう。而して信文類の別序は、正に經釋の意を承けて、且らく疑問を至して遂に明證を出すとして、この一卷に來つて、三心は即一であり、一心は正因なりと顯示し、また念佛往生と信心往生との相即の意を明らかにされるものである。是の故に、行文類には信に言及はしてあるが、信の説明はなく、信の説明は信文類を俟つとする所以である。行文類には、すでに衆生の念佛を、一卷の始終に亘つて示されてある。口稱の念佛を出してある以上、口稱のよつて出る信心に言及されるのは當然である。そのこれに言及し、また名詞の出でたることを以て、それが直に説明と見る可しとせらるゝ安井講師の意見には同意出來ないのである。

三 化身土文類の横超の釋について

次に化身土文類に、「門餘八萬四千」の語について破文の釋を施され、門を八萬四千の假門とし、餘を本願一乘海とされてある。而してそこに通じて釋迦一代の佛教を判じて聖淨二門とし、其の淨土門に攝屬する法をあげて

就三此門中、有_二横出横超假眞漸頓助正雜行雜修專修_一也
と標し、その超を釋して

横超者、憶_二念本願_一離_二自力之心_一、是名_二横超他力_一也。斯即專中之專、頓中之頓、眞中之眞、乘中之一乘。斯乃眞宗也。已顯_二眞實行之中_一畢

と示されてある。この文に就いて、さきに結城令聞教授は、これを以て行卷の中に已に信は明し畢つてある證據であると主張されたのに對し、私はこれはたゞ一乘の法を詮はずの語であり、「憶_二念本願_一離_二自力之心_一」とあつても、それを以て信の説明が行文類にありとするの意ではないとした。ところがこれについて、安井講師は、結城教授の説、並に私の説を、ともに評しておられるが、その私の説に對して「已顯_二眞實行之中_一畢の句を一乘の語にかけて云々せられるのは教授のいわれるように、こゝは教判の下であるから、當を得ているけれど、また一乘は他力信心以外のものでないから、全然憶念本願の句意を離れて此文を解するのは無理であろう」といひ、また「化卷の横超者云々に就いての兩教授の見方は疎雜であらう」といつて居られる。而して後、安井講師自身の考を述べられるところに、結城教授の説に對して「聖人は此句を以て他力信心に關する要義の全體を顯わされたのではなく、それは文字どうりに他力の信を解して本願を憶念して自力の心を離ると、そう示されただけであつて、行卷では未だその本願と憶念との關係を明かに顯わされてはいない。茲に行卷に於ける信の説明の不備なところがある。即ち行卷は大行を顯わすに就て、本願を信じて自力の信を離れよとすゝめ、それを一乘とする旨を顯はし畢られたのであるが、未だその本願と憶念との關係、即ち他力廻向の信樂といふ義を顯わされず、信心正因の義を示されなかつたから、信卷に於いて廻向の理を極めて三心即一心一心即金剛心の義を顯わし、他力の信心に名號（稱名）を具すべき旨をも注意し、以て涅槃眞因唯以信心の意を成ぜられたのである。注意して信卷を見ると、こゝには本願を憶念せよといふことは述べられていず、唯こ

のすゝめに乗じて願心即信心、即ち他力信心の信樂を顯わそうと努め、眞實信心必具名號の旨を注意されている」と述べていられる。この敘述は、安井講師がさきに、歸命とか憑むとか聞信とか信樂とか憶念とか、種々の名目を用いることが信そのものゝ説明ではないか、それらの名目は信相を詳らかにするものであると主張されたのと矛盾するように思はれる。それはとにかくとして、「横超者」云々の文意に就いて私の意見をのべるならば、『教行信證文類』の中に、一乗の義を示されるところが三ヶ處である。行文類の行一念の釋と一乘海釋、而して化身土文類の門餘の釋とである。何れも聖道及び要門に對して、本願一乗の法の超勝を顯はされるのである。行一念の釋には、『大經』流通分の彌勒付屬の文をあげて後、その意を釋して

信知。大無上者一乘眞實之利益也。小利有上者則是八萬四千之假門也

とある。而してこの一乗の義を承けて、更に本願一乗の分齊を示されるのが一乘海であり、此等の釋と對映して出されるのが、化卷の門餘の釋である。されば化卷に出される横超者等の釋意は、行文類の釋意を出されるのであるが、かの文中の「憶念本願離自力之心」の句は行文類の釋の何處と對照するか、行文類全體の釋が名號を大行とし、此の大行は法界の衆生に對して動き、如實の行者をして信ぜしめ、稱せしめつゝありと釋されるのが祖意なりと、吾人は己にのべたのであるが、その信じ行ずる相が、そのまゝに憶念本願離自力之心の義である。また文の對照を指すならば、行一念の釋下に、『大經』付屬の文に次で善導の釋文を出される。その中に、『禮讚』前序の深心釋が出されてある。『禮讚』前序の深心釋を引かれるのは、行文類の行一念釋と、信文類の『散善義』の三心釋を引かれたあとの二ヶ所であるが、その『禮讚』の深心釋は、『散善義』の深心釋の中、高祖の所謂第七深信の「一心專念彌佛名號」等の文意を攝めたものである。かの信法の釋には、稱名を出して語つてある。

信三知彌陀本弘誓願一及稱三名號下至十聲等上、定得往生。乃至一念無有疑心、故名深心。

といふ。乃至十聲一聲に至るまで、無有疑心を以て稱へる、これが信知本弘誓願の義なりとするのである。いまこの文を、行一念釋に引用されるものは、一聲十聲みな無有疑心であり、所謂行の一念も無有疑心の他力の義なることを示されるの意である。またこれを承けて、更に詳しくされる一乘海釋には、念佛諸善比較對論と標して、二教對二機對を設け、その二教對の中に「自力他力對」があり、二機對の中に「信疑對」がある。此れは明らかに、一乘法を以て他力であり、無疑の信を以て念佛するものとされるのである。此の行一念釋中に、『禮讚』の深心釋を出し、一乘海釋に、自力他力對、信疑對を設けて顯はされるの意が、化卷の横超釋の「憶念本願離自力之心」となつて來るのである。されば化身土文類の此の文は、行卷に示されたる教判一乘の意を出されるものとするのである。而して屢々申す如く私は、行文類に信を含まぬといふのではない、もとより信に言及してある。さり乍らその信の説明がなく、信の説明は之を信文類に俟つのである。而して所謂信の説明とは、たゞ信心に關する名目の出ているのを以て云ふのではなく、本願の三心の説明、三心即一心、一心即正因の義を明らかにせねば、信の説明とは見られぬとするのである。以上安井廣度氏の所説に對し、たゞ一部分だけ私の意見を述べたのであつて、これは猶ほ未完である。適當な機會に於いて、更に私は詳論するつもりである。この原稿は大會に意見を發表したものの、義務として、書く可きことを需められ、紙數並に期日も御通知をうけていたのであるが、七月以來かれこれと旅行をしておつて、怠つていた。一兩日少閑を得てかいたのであるが、敘述の順序も亂雑であり、而も粗末になつたと思つてゐる。しかしかき直す暇がないので、後日詳論する時に改めたいと思つてゐる。

(八月五日しるす)